

国指定史跡 曾根遺跡群

WAREZUKA

ワレ塚古墳

第1次発掘調査概要

前原市文化財調査報告書

第88集



ワレ塚より鉄瓶塚を望む（北側より）

2005

前原市教育委員会

はじめに

ワレ塚古墳は曾根丘陵上に所在する前方後円墳です。

時をさかのぼること約1500年。古墳が造られた当時、墳丘の上に立つと、眼下には遠く糸島半島が広がっていました。当時の糸島は、わか国と中国大陸・朝鮮半島との交流拠点の一つであり、この古墳の被葬者も糸島半島に出入りする船を眺めていたかもしれません。

近年の都市化により、古墳の周囲の眺めは一変しましたが、大きな墳丘は変貌を遂げていく糸島の未来を暖かく見守ってくれることでしょう。

平成16年度に行った発掘調査では、ワレ塚古墳に関する新事実が次々と明らかになり、その重要性を改めて認識することとなりました。

本書は、最新のワレ塚古墳情報を皆さんにお伝えすることを目的として刊行しました。本書が前原市文化財の理解、保護思想の普及啓発のお役に立てば幸いです。

平成17年3月31日

前原市教育委員会

教育長 菊 竹 利 嗣

例 言

1. 本書は平成16年度に実施した国史跡曾根遺跡群の一つのワレ塚古墳の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は牟田華代子の協力を得て瓜生秀文が行った。また、遺構、遺物写真の撮影は瓜生・江野が行ったが、現場の空中写真撮影は（有）空中写真企画に委託した。
3. 整理作業は山崎賀代子、川上辰子、友池真由美、石原美恵子の協力を得て瓜生が行った。遺物の実測は山崎が行った。製図（トレース）は友池が行った。
4. 本書の執筆・編集は瓜生が行った。
5. 本書の報告内容は資料整理途中での認識であり、今後資料の整理過程で修正を加えることもあるので、あらかじめご了承ください。

目 次

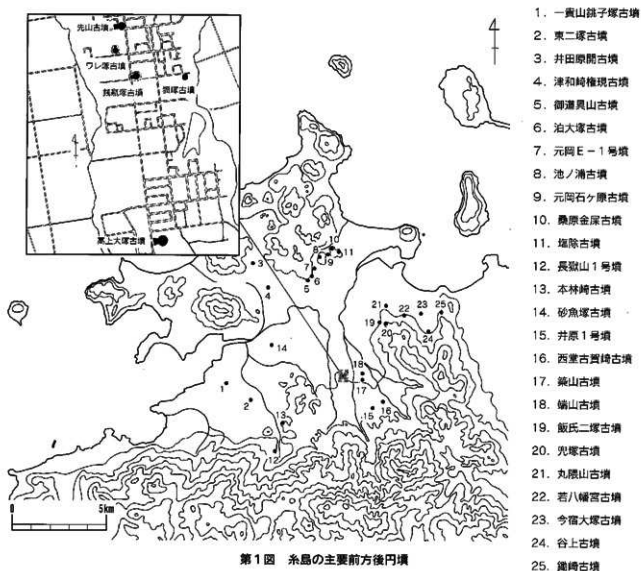
I. ワレ塚古墳の位置と歴史的環境	1
II. 調査の記録	
1. 調査経過	2
2. 調査報告	
(1) 遺構	2
墳丘 (2) 周壕 (8)	
(2) 出土遺物	9
土器 (9) 埴輪 (10)	
III. おわりに	12

I. ワレ塚古墳の位置と歴史的環境

ワレ塚古墳は前原市の中央部、大字曾根字431、432番地他に所在する5世紀から6世紀にかけて築造されたとされる前方後円墳である。背振山脈から北側に向かって派生する曾根丘陵上に位置する。

ワレ塚古墳のすぐ北側にはかつて先山古墳があった。曾根丘陵の開発の際、消滅してしまった。墳丘には葦石が施してあったとの証言もあり、その消滅は非常に惜しまれる。その先山古墳所在想定地から北側には弥生時代の伊都国王墓とされる平原遺跡が所在する。

ワレ塚古墳のすぐ南側には銭瓶塚古墳が所在する。この銭瓶塚古墳は平成15年度に発掘調査が実施され、盾形に巡る周壕の形態が明らかになったほか、周壕からは形象埴輪や岩俣など遺物が出土している。築造時期は5世紀中葉でワレ塚古墳に先行するとされる帆立貝形前方後円墳である。銭瓶塚古墳の西側は狐塚古墳が所在する。5世紀前半に築造された円墳である。そして、銭瓶塚古墳の北側にはかつて高上大塚古墳が所在したが消滅している。



II. 調査の記録

1. 調査経過

昭和57年10月にワレ塚古墳は曾根遺跡群の一つとして国指定史跡に指定されたが、その当時の指定は地形測量図を基にしたものであった。史跡指定から約20年経過しており、遺構の保全が危ぶまれていた。その対応のため、ワレ塚古墳の正確な墳丘規模・形態などの確認が必要になり緊急に調査が実施された。

調査では古墳の中心の軸線を基準に計9ヶ所のトレンチを設定した(図3)。まず、前方部に1トレンチを設定した。その結果、2段の葺石と埴輪列を良好な状態で検出したため、その延長方向を確認するため前方部に5ヶ所のトレンチを設定し調査を行った。また、8トレンチを延長した結果、周壕の一部を確認したため、その延長方向を確認するために6、9トレンチを設定し引き続き調査を行った。さらに、後内部の墳丘の規模を確認するために5、7トレンチを設定し調査を行った。

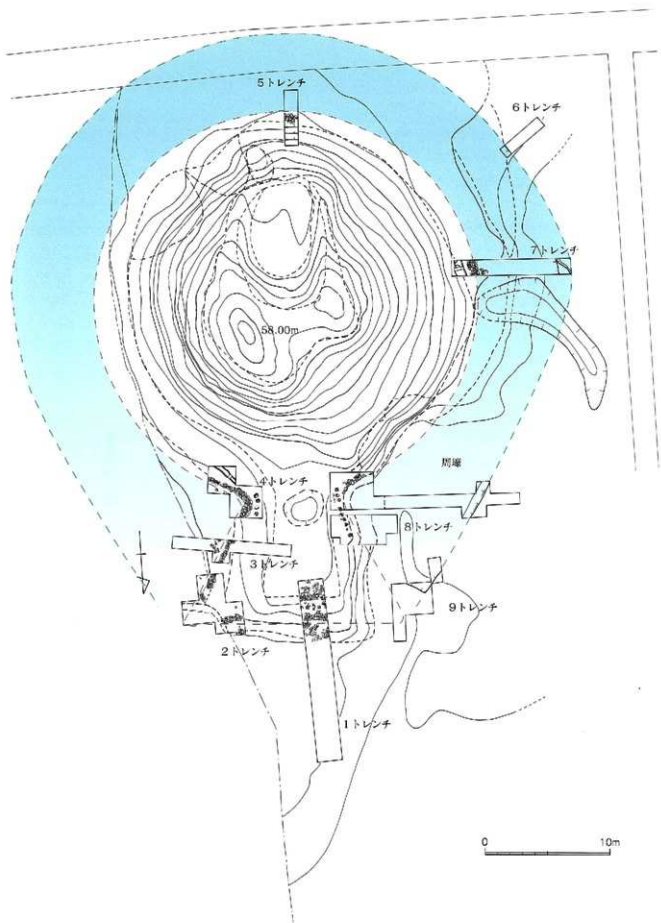
平成16年11月21日には市民を対象とした現地説明会を実施し、調査を終えた後、埋め戻して原状に復している。

なお、調査にあたっては多くの先生方に御指導いただいた。記して感謝の意を表したい。

清野孝之(文化庁)、西谷正(伊都岡歴史博物館館長)、柳田康雄(博士(歴史学))、橋口達也、小池史哲、新原正典、重藤輝行(福岡県教育委員会)、小西龍三郎((有)修復技術システム代表取締役)、宇野慎敏((財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室)



第2図 ワレ塚現況測量図 (1/450)



第3図 ワレ塚古墳の調査地点と周壕 (S=1/300)

2. 調査報告

(1) 遺構

調査の結果、ワレ塚古墳は墳丘部が全長42m（後門部径30m、前方部長12m）の帆立貝形前方後円墳であることが判明した。そしてその周囲には馬蹄形の周壕が巡っている。

なお、墳頂部は後世の擾乱のためか陥没している。

墳丘

前方部

前方部は長さ約12m、東クビレ部と西クビレ部との間は約9m、墳端部は長さ約17mを測る。当初は現況測量の結果をふまえて墳端部に向かってあまり広がらない前方部を想定していたが、調査の結果、クビレ部が細く引き締まり、墳端部に向かって大きく広がる前方部であることがわかった。

1段目の葺石は6、8、9トレンチをのぞくすべてのトレンチで検出された。高さにして約0.5から1mほど残存していた。東クビレ部が最も残存状況は良かった。なお、西側の墳丘裾部はかつて家屋建築の際、上採り等の造成を受けたため、大きく損傷し1段目の葺石等も残存していなかった。

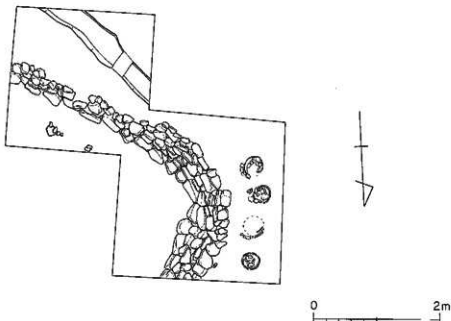


1. ワレ塚古墳全景

墳丘2段目の葺石が1、3、8トレンチで検出された。高さにして 約0.3から0.5mほど残存していた。特に、1トレンチの葺石の残存状態は良く、この古墳の前方部は2段築成であったことがわかる。また、現況でも、前方部の頂上部には石材の分布が見られることから2段目の頂上部にも貼り石等が設けられていた可能性がある。

葺石は、東クビレ部と前方部端部が最も整然と積まれていた。石材は角の取れた川原石で外部から運び込まれたものである。なかでも東側のクビレ部中央部には縦方向に意図的に整然と設置された石列群を確認している。これは葺石設置の際、基準となった区画石列と考えられ、それを基準として葺石が設置されたのであろう。

出土遺物としては、埴輪列を各トレンチの1段目の葺石と2段目の葺石の間のテラス部分で検出している。埴輪と埴輪との間は約0.2から0.3mを測る。このことから、前方部の1段目の葺石と2段目の葺石の間のテラス部分については幅約0.2



第4図 東側クビレ部実測図 (S=1/60)



2. 東側クビレ部 (4トレンチ)

から0.3m間隔で埴輪が設置されていたと想定される。

また、前方部端部（1トレンチ）付近と東西クビレ部裾部（4、8トレンチ）からは破損した状態で須恵器片と埴輪片がまとまって出土している。その中でも特に、前方部端部（1トレンチ）では葦石の裾部に埴輪片と須恵器片がまとまって出土し、1段目



3. 1トレンチ



4. 前方部

の葦石と2段目の葦石の間のテラス部分に設けられている円筒埴輪の中にも須恵器が伏せた状態で検出されている。さらに、1、4トレンチの1段目の葦石の間からも須恵器片と埴輪片を検出することができることから、本来は墳丘上もしくは1段目の葦石と2段目の葦石の間のテラス部分に須恵器、埴輪等が設置されており、それが崩落、破損して葦石裾部に堆積したのであろう。このことを踏まえて考えると、前方部端部と東西クビレ部で墓前祭祀が行われていた可能性が高い。

後円部

後円部径は約30mを測る。

調査の結果、5、7トレンチの両方から1段目の葦石を検出した。葦石の残存状況はあまり良くなく、高さ約0.7mほど残存していた。葦石の石材は前方部と同じく角のとれた川原石と考えられるが、積み方は前方部に比べてかなり粗雑に組んであった。

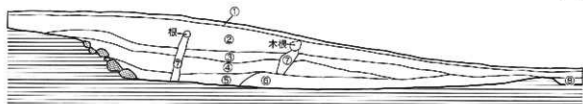
出土遺物としては7トレンチの葦石の



5. 7トレンチ



54.50m



- ①表土
- ②増成土
- ③黒灰色土
- ④褐色土
- ⑤淡黄灰色粘質土
- ⑥黄褐色粘質土
- ⑦礫石
- ⑧淡黄灰色土

0 2m

第5図 7トレンチ実測図 (1/60)

裾部から埴輪片が検出された。そして1段目のテラス部分に埴輪の掘り方も検出されている。このことから後円部にも埴輪を設置したと想定できるが、その出土量から推測すると前方部のように密に設置されていたとは考え難い。

調査区の制約のため、後円部では1段目の墳丘の規模確認で調査を終えている。そのために、墳丘の1段目から上部の情報は得られなかったが、現況状況から推し量ると2段築成の可能性が高い。今後の調査に期する所である。

周 壕

8トレンチを延長して調査した結果、周壕の一部らしき段落ちを検出した。その延長方向を確認するために6、9トレンチを設定し引き続き調査を行った結果、墳丘の西側のみではあるがその延長部を確認できた。

形状は馬蹄形を呈し、全周はせず前方部のコーナー一部で消滅する。残存状況としては8トレンチで現地表から深さ約0.6mほど残存していた。8トレンチの土層観察の結果、暗黒色粘質土の堆積が浅いことから、この段落ちは墓域を明確化するために設置された周壕であった可能性が高いと思われる。

出土遺物としては8トレンチの墳丘部裾部から破損した状態でまとまって須恵器や埴輪片が出土している。これらも本来は墳丘上もしくは2段目と1段目との間のテラス部に設置されていたものが崩落、破損して8トレンチの墳丘部裾部に堆積したと考えられる。なお、そのなかには馬などの動物の形象埴輪も含まれる。



6. 8トレンチ

53.50m



- | | |
|--------|----------|
| ①表土 | ⑤黒灰色粘質土 |
| ②褐色土 | ⑥暗黒灰色粘質土 |
| ③暗褐色土 | ⑦暗黒灰色粘質土 |
| ④淡黒灰色土 | |

0 2m

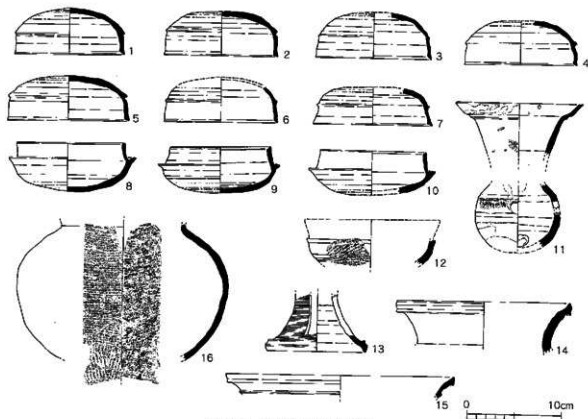
第6図 8トレンチ土層実測図 (1/60)

(2) 出土遺物

今回の調査の結果、各トレンチから様々な遺物が出土した。そのなかでも特に東西クビレ部と前方部端部においてまとめて遺物が出土したため、1、4、8トレンチから出土した遺物を中心に概説することにする。

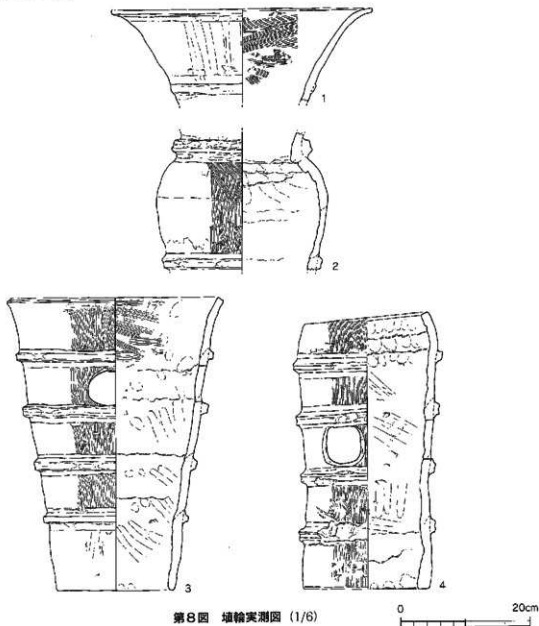
土器

器種としては坏・罍・高坏・甕が出土している。特徴として、坏（蓋・身）の口縁端部の凹みが明確である。そして、全器種に共通することは表面の調整が丁寧なことである。1から16は須恵器である。1は坏蓋。復元口径11.6cm、器高4.9cmを測る。胎土は緻密で焼成は普通。色調は灰オリーブ。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。2は坏蓋。復元口径12cm、器高4.7cmを測る。胎土は緻密で焼成はややあまい。色調は明オリーブ。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。3は坏蓋。復元口径12.2cm、器高4.9cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調はやや青みがかったオリーブ灰。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。4は坏蓋。復元口径12cm、器高4.7cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は灰オリーブ。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。5は坏蓋。復元口径12.8cm、器高4.7cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は灰オリーブ。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。6は坏蓋。復元口径12cm、復元器高4.7cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は灰オリーブ。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。7は坏蓋。復元口径12.4cm、復元器高4cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は青灰色。調整は外面の天井部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。8は坏身。口径11.5cm、器高5.2cmを測る。胎土は砂粒を



第7図 須恵器実測図 (1/4)

含み焼成はあまい。色調は灰白。調整は外面の底部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。9は坏身。口径10.6cm、器高4.75cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は灰オリーブ。調整は外面の底部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。10は坏身。復元口径11.2cm、復元器高4.6cmを測る。胎土は砂粒を含み焼成はあまい。色調は灰オリーブ。調整は外面の底部に回転ヘラけずり、内面は回転ナデが施されている。1から10は1トレンチから出土している。11は竈。復元口径13.4cm、復元胴径9cmを測る。口縁部外面には自然釉がかかる。4トレンチと8トレンチから出土。表面の調整から同一個体と判断した。本来は前方部の填丘上にあつたのが破損後に両トレンチに流れ込んだ可能性がある。12は高坏の胴部。調整は外面体部にヘラ削り、内面に回転ナデが施されている。8トレンチから出土している。13は高坏の脚部。長方形の透かし孔を三方に施している。調整は外面に細かいカキ目、内面に回転ナデが施されている。2トレンチより出土している。14は壺の口縁部。復元口径18.2cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は明オリーブ灰。調整は不明。8トレンチより出土した。15は壺の口縁部。復元口径24cmを測る。胎土は緻密で焼成は堅緻。色調は明オリーブ。調整は不明。8トレンチより出土した。16は壺の胴部。



第8回 埴輪実測図 (1/6)

胴部最大径22.2cmを測る。胎土は砂粒を含み焼成は堅緻。色調は青灰色。調整は外面にタタキの上にカキ目が施され、内面は当て具痕がかすかに残る。8トレンチより出土した。

壺 輪

器種としては朝顔型埴輪、円筒埴輪・形象埴輪等が出土している。全器種ともに小型化しており調整も粗い。そのなかでもここで図示したのは朝顔型埴輪、円筒埴輪である。1から4は8トレンチから出土した。1は朝顔型埴輪の口縁部。復元口径42cmを測る。胎土は粗いが、焼成は良好である。色調は内・外ともに橙色。調整は内面にハケ目が施されている。2は朝顔型埴輪の肩の部分。胎土は粗いが、焼成は良好である。色調は内・外ともに橙色。外面は突帯と突帯との間に細かいタテハケが施されている。内面は胎土のつなぎ目が残っている。1と2は同一個体の可能性が高い。3

は円筒埴輪。復元口径33cm、器高47.1cm、底径18.6cmを測る。胎土は粗いが、焼成は良好である。

色調は内・外ともに橙色。上段に透かし孔が設けられ、突帯が4本設けられている。調整は外面に粗いタテハケが施され、内面は胎土のつなぎ目が残る。

4は円筒埴輪。口径19.5cm、器高42.7cm、底径19.3cmを測る。胎土は粗いが、焼成は良好である。色調は内・外ともに橙色。中段に透かし孔が設けられ、突帯が4本設けられている。調整は外面に粗いタテハケが施され、内面は胎土のつなぎ目が残る。

なお、8トレンチからはこの他に馬等の動物の形象埴輪も出土している。これらは墓前祭祀に伴うものと考えられる。今回は割愛するが、次回の機会に報告したい。



7. 形象埴輪 (馬)



8. 円筒形埴輪

Ⅲ. おわりに

第1次調査ではワレ塚古墳について多くの新しい知見を得ることができた。

まず、古墳の正確な墳丘規模・形態が明らかになった。墳丘部が全長42m（後円部径30m、前方部長12m）を測る帆立貝形前方後円墳であることが判明した。そしてその周囲には馬蹄形の周壕が前方部のコーナー部まで巡っている。この馬蹄形の周壕までを含んだ古墳の墓域は約50mに達する。当初、現況測量図から墳端部に向かってあまり広がらないカギ穴状の前方部を想定していたが、調査の結果、クビレ部が細く引き締まり、墳端部に向かって大きく広がる前方部であることがわかった。

墳丘は前方部で2段築成、後円部で2段築成と考えられ、葺石は前方部で2段目、後円部で1段目まで敷けられていることを確認している。その葺石は東クビレ部で9割が原位置を保っていた。このため葺石の葺き始めから終わりまでの施工方法の一部を確認することができた。まず根石を配し高さ約1mまで縦方向の区画石列を置き内部を充填してから横方向の区画石列でとめる。葺石の積み方については東クビレ部と前方部端部が最も整然としており、場所によってその状況は異なるが、基本的にはほぼ同じ工法で葺石が設置されていたと考えられる。

遺物としては須恵器・埴輪が出土している。なかでも東西クビレ部（4、8トレンチ）と前方部端部（1トレンチ）から破損した状態でまとまって須恵器片・埴輪片が出土しており、そこで墓前祭祀が行われていたと考えられる。その須恵器の坏蓋・坏身は、中村編年で陶邑Ⅰ型式5段階とⅡ



9. 8トレンチ埴輪出土状況

型式1段階のものがあり、若干の時期差が認められる。実年代を与えるならば5世紀末と6世紀初頭の2時期となる。この時期差から墓前祭祀が複数回実施されたととらえることが可能になる。その出土遺物と周壕の形態からワレ塚古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて築造されたと考えられる。

曾根丘陵上にはワレ塚古墳を含み3基の古墳が現存している。いずれも曾根丘陵を含む三雲一帯を統治した首長墓と考えられ、狐塚古墳（円墳・5世紀前半）から銭塚古墳（前方後円墳・5世紀中葉）までその築造時期と順位をたどれていたが、今回の調査の結果、ワレ塚古墳が銭塚古墳の後に築造されたことがわかり、狐塚古墳、銭塚古墳、ワレ塚古墳の前後関係が明らかになった。

古墳時代になると、首長墓は主に糸島半島の海岸部一帯に築造されるようになる。このワレ塚古墳は内陸部に位置し、今宿大塚古墳（福岡市西区今宿所在・前方後円墳・6世紀前半）などと比較すると規模的には小型であるが、それでも埴輪、冨石等が設置されている。このことからこの古墳の被葬者は小首長でありながらもヤマト政権との親密な関係をもっていたことを指摘できる。これは伊都国が滅亡しても曾根丘陵を含む三雲一帯が引き続いて対外交渉の重要拠点であったことを意味し、そこを統治していたからこそワレ塚古墳の被葬者は古墳を築造する際にヤマト政権から埴輪の設置を許可されたと考える。

ところで、ワレ塚古墳が築造された5世紀末から6世紀初頭は筑紫（九州）において筑後地方に本拠地をおく筑紫君が最も勢力を伸張していた時期でもあった。「日本書紀」によると、継体天皇21年（527）、筑紫君磐井がヤマト政権に対して反旗を翻し、翌22年に御井郡の決戦で誅殺されている。同書によると「筑・豊・肥」の三地域にその支配が及んでいたとき、糸島半島一帯もその領域に含まれていたと考えられる。ワレ塚古墳に埴輪、冨石等が設けられていることからこの古墳の被葬者とヤマト政権との間には親密な関係があったことを指摘できるが、筑紫君とは如何なる関係をもっていたのであろうか。今回の調査では明らかにできなかったが、今後資料の蓄積を持って再度検討したいと思う。

報告書抄録

ふりがな	クニシテイシセキソノイセキガンワレツカコフン ダイ1ジハクツチウサガイヨウ							
書名	国指定史跡 曾根遺跡群 ワレ塚古墳 第1次発掘調査概要							
調査名	前原市文化財調査報告書	巻次	第88巻	編者名	瓜生秀文			
編集機関	前原市教育委員会							
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
国史跡 ワレ塚古墳	福岡県前原市大字 曾根字中431番地			33° 32' 01"	130° 13' 59"	平成16年8月～ 平成16年12月	160㎡	重要 調査 遺跡
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国史跡 ワレ塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘、周壕		須恵器、埴輪			

国指定史跡 曾根遺跡群 ワレ塚古墳

第1次発掘調査概要

前原市文化財調査報告書

第88集

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

印刷 株式会社 重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号